

みちのく・では の旅

高野敦志



目次

はじめに	1
平泉の中尊寺へ	2
毛越寺の庭園	9
下北半島に行く	13
田沢湖および乳頭温泉	27
八甲田山と奥入瀬	35
三内丸山遺跡を訪ねて	43
夏の蔵王をゆく	47
山寺は立石寺	55

55 47 43 35 27 13 9 2 1

秋田のお城は久保田城

白神山地と十二湖

男鹿半島を巡る

あとがき

80 67 62 59

はじめに

ここに集めたのは、僕が東北を旅した全四回の記録である。訪れたのは第一回目が平泉、下北半島、田沢湖、第二回が八甲田山、奥入瀬、十和田湖、第三回目が蔵王、立石寺、第四回目が秋田、白神山地、男鹿半島である。最初の旅が一九九五年で最後の旅が二〇〇九年だから、三十代初めから四十代半ばにかけての旅の記録である。といっても、最初は一人旅、二回目は家族と、あとの二つは友人との旅だった。

平泉の中尊寺へ

僕が初めて東北を旅したのは、今から二十年近く前のことである。最初に選んだ行き先は、奥州藤原氏の都平泉だった。弥生文化が栄えるようになって、東北では縄文時代のような狩猟・採集中心の文化が続いていた。平安初期になっても、朝廷に服属しない者がいて、蝦夷征伐の対象となっていた。

陸奥は「みちのく」とも呼ばれるが、「道の奥」が語源であって、日本人にとつては地の果てというイメージがあつた。そんな辺境の地にきらびやかな仏教文化が開いたのは、黄金が発見されたからであり、藤原清衡から泰衡まで、約百年の間京風の仏教都市が栄えたわけだが、源頼朝に攻められてあ

つげなく滅んでしまった。その奥州藤原氏の文化の名残の一つが、平泉の中尊寺なのである。

東北本線の平泉駅を降り、中尊寺境内の月見坂参道を上っていく。ここは慈覚大師円仁の開創とされる天台宗の寺院であるが、藤原清衡が前九年・後三年の役で倒れた死者を弔うために建立したというのが実際らしい。

左右に杉の大木が並んでいるところは、山岳寺院独特の静寂さに包まれている。日本人の宗教心の根本は、山に漂う靈氣に対する尊崇の念から発したもののだろう。普段は余り信仰心を持っていない人間でも、天を覆う杉の枝葉から降りてくる気を浴びるだけで、心の奥深くに眠っていた魂がよみがえってくるものである。

坂の中ほどの弁慶堂には、悲劇の武将、源義経・弁慶主従の木像が安置されている。向かい側の望古台からは、緑あふれる水田と、蛇行する北上川の流れが見える。小さな林の辺り、ちようど川の流れが変わる付近が高館の跡だという。義経が最期を遂げた地が、こうしてパノラマの形で見渡せるのである。長い参道を上りつづけて、ようやく中尊寺の本堂に出た。参拝した後、大日堂、不動堂、阿弥陀堂などが並ぶ道の先、林に囲まれた中に目指す金色堂はあった。これは鉄筋で作られた覆堂の内側にある。

文字通り金色の堂は、壇上に阿弥陀三尊と二天像、六地藏が祀られている。精魂込めて作られた美の極致の下に、藤原三代のミイラと四代泰衡の首が収められていることに、信じがたい驚きを感じる。そもそも、自身の遺体を火葬にも土葬にもせず、保存しようと思ったのはなぜだろう。金色に輝く諸仏の下に葬られることで、死後に自身が仏となって拜まれることを望んでいたのか。

東北はミイラが多い地方である。出羽の即身仏は真言宗の開祖空海に倣って、禪定に入ったまま死を迎える過酷な修行の成果だった。飢饉で苦しむ農民を救いたいという思いがあったとされるが、死後に仏として崇められることを望んだ点では、金色堂に眠るミイラと共通点がある。

ただし、四代泰衡は源頼朝によって、非業の死を強いられたわけだから、恨みを金色堂の中に封じ込める意図もあったらし

い。鎌倉側にしてみれば、泰衡に何としても成^{じようぶつ}仏してもらわねばならなかったわけである。成仏が叶^{かな}わない場合も想定して、金色堂を囲むように旧覆堂が作られていたのは、二重の覆いで滅ぼされた一族の呪^{のろ}いを封じ込めようとしたのである。

そのおかげで金色堂は、八百年後の現在でも、美しい姿を保つてこられたわけだが（厳密には修復されているからとも言えるのだが）、あの人工的な壇の輝きには、恨みをじつとこらえた藤原四代の放つ靈魂の妖気がこもっていると考えると、背筋に冷たいものが走ってしまう。金色堂が鬼気迫る美しさを誇っているのは、そのためだったのではないか？ 覆堂の外に出ると、ヒグラシの声がして救われたような気持ちになった。

少し離れた位置に、旧覆堂は建っていた。これは新しい覆堂

が造られて、移築されたものである。松尾^{まつおぼし}芭蕉は義経終^{しゅうえん}焉の地高館に足を運んだ後、中尊寺の金色堂（光堂）を拝している。『奥の細道』には「七宝散うせて、珠^{たま}の扉風^{とほそ}にやぶれ、金^{こがね}の柱霜雪に朽て」とあるから、金色堂が現在の美しさを保っているのも、実は後世の修復のおかげだということが分かる。

芭蕉が目にした覆堂は、この移築された方である。屋根や柱はしっかりしているが、長年手入れがされなかったのだろう、太い木の柱は艶がなくなはげて、割れ目や傷が痛々しく見える。左脇には芭蕉の銅像が建っている。この覆堂の前で詠んだ句が

五月雨^{さみだれ}の降のこしてや光堂

である。

金色堂から本堂の方に少し戻った讚衡藏さんこうぞうには、中尊寺の文化財が保存されている。目を引いたのは、金色堂の壇の下、棺に収められていた副葬品である。枕などには茶色いしみがついていて、少し前まで遺体が載っていたと思えるほど生々しい。袈裟けさなどはほとんど原型をとどめていない。念珠には水晶が用いられ、奥州の黄金も中から発見された。これを見てはじめて、金色堂が本来持つ意味を、感覚的にも理解することができた。

毛越寺の庭園

毛越寺もうつしは円仁の開基で藤原清衡、基衡もとひら親子が再興した天台宗の寺院である。かつては中尊寺をしのぐ大寺院だったが、伽藍がらんの大半は戦乱で焼失し、現在は浄土庭園により往事をしのぶことができる。

今は宿泊者を受け容れていない宿坊に、その日は泊まることのできた。日暮れがすでに迫っていたが、毛越寺の境内を散策さんさくすることにした。人影はすでになかった。大きな池や築山つきやまが、当時の面影を伝えている。浄土式と言われるだけに、池の縁の曲線には言い知れぬ美しさがある。周囲を巡るだけで三十分はかかるだろう。

池の向い側に回ると、かつて存在した円隆寺の礎石が残っている。金や紫檀をふんだんに用いたお堂には、日本で初めて玉を眼にはめ込んだ仏像が安置されていた。荘厳な寺院も荒廃して、ついに摩滅した礎石のみとなった。そこに建立された堂宇を、心の中で再現してみようではないか。鐘楼などの建物は、すべて朽ち果ててしまったが。

池の美しさだけでも、魂を癒す力を持っている。水面の中央には、龍の頭をかたどった船らしきものが二艘、月の光を浴びて浮かび上がっている。遣り水は復元されたもので、縁に敷き詰められた石は、雨水が池に注ぎ込むように工夫されている。山門の脇を通り、出島石組が見える辺りまで来た。突端には池

中立石がそそり立っている。

石には心があるという。力がどちらを向いているか、石がどちらに行きたがっているか、庭職人には分かるという。池中立石は斜め上の宇宙に向かって、飛び出そうとしている。一方、静かな水面は水平に広がろうとして、斜め上に引っ張る石の力と引き合って、絶妙なバランスが取れているのである。全く静止してしまっているようで、牽引する緊張がみなぎっている。静は引き合う力のバランスによって、かろうじて保たれているのである。

円隆寺の礎石がある位置から、ちょうど池を半周していた。対岸にあった伽藍の右側には、鐘楼が見られたはずである。もう闇に沈んだ遣り水の辺りでは、かつて平安貴族が歌会を催し

ていたことだろう。

雁がんのつがいが二羽、薄暗い空を横切っていく。池の水には広
がった雲となだらかな稜線が映っている。鏡となった水面みなもは、
折々の自然と人の心をとらえる。ただ岸の近くは微かな波紋が
生じている。底から清水が湧いているのかもしれない。

下北半島に行く

平泉を出たあと、野辺のへじ地から大湊おおみなとせん線の快速下北に乗り込
だ。陸奥湾むつわんに沿って、凧ないだ海や松林の脇を、気動車はかなり
のスピードで過ぎていく。

半島の中ほど、陸奥横浜は寂しい漁村である。武蔵国むさしのくにの横浜
村も、幕末に開港するまでは、ここと同じように、人影もまば
らだったのだろうか。下車したのは、終点大湊おおはたせんの一つ手前、下
北駅である。当時はここから下北交通大畑線おおはたせんが延びていたので、
気動車に乗り換えて田名部たなぶ駅まで行った。

駅を下りて、恐山おそれざん行きのバスに乗り換える。なぜそこへ向
かおうとしているのか。イタコに口寄せしてもらおうというわ

けではない。小学校時代の女の先生が、下北出身でよく実家や恐山のことを話してくれたからである。先生は四年生の時の担任で、子供の目から見ても美人だった。何事も本音で話してくれたし、ちよつとボーイッシュな魅力もあった。先生の名前は妙子たえこなので、「女少ないつて書くんだね」と笑いながらも、少年たちは皆よくなついていた。

先生の実家はむつ市大湊にあつた。海沿いの家で、縁の下は波に洗われているという話だった。海の上に建つ家なんて、何だか巖いづくしま島神社みたいだなと思つた。先生の幼い頃の遊び場が、イタコで有名な恐山だった。

「この世とあの世の境さかいがあつて、先生は何度も行つたり来たりしたのよ」

十歳の僕にとっては、恐山に本当に生死の境があると思われ、先生が特別な能力のある女性のように感じられたのだった。先生が語つた霊界の入口を、この目で確かめたいという少年の日の思いが、今回、ここにやつてきた理由である。

町を抜けるとバスはやがて、林の中を縫つていく。急勾配の坂を上つたかと思つと、今度は蟻地獄ありじごくへ落ちるように、谷底深く下つていく。宇曾利山湖うそりやまこの水面が見えた途端、窓からは鼻を突く亜硫酸ガスの臭いがした。卵が腐つたような刺激だ。「三途さんずの川」に差しかかったとき、朱塗りの太鼓橋のたもとで、イタコのお婆さんが小さくなつていた。

恐山という地名の由来だが、湖の名前になつている「ウソリ」

と同じく、アイヌ語の ushor (入り江) がなまり、火山地帯の荒涼とした風景と相まって、「恐山」というおどろおどろしい名前が付き、死者の魂が集まる霊場と考えられたらしい。

口寄せで語られる内容は、どれもこれも似たり寄ったりだという。以前、人類学者の西江雅之先生にうかがった話だが、イタコの語りには信憑性がないだろうと、マリリン・モンローの霊を、イタコに呼び出してもらったそうだ。本物の霊なら英語を話すはずだが、東北訛りの語り口で、毎日何を食べているかと問うと、ご飯を炊いて味噌汁を作っていると答えた。それ以来、外国人の霊を呼び出すのはお断りになったということだ。

恐山のバス停を下り、円通寺の山門をくぐった。ここは

曹洞宗の寺である。只管打坐の道元禪師の教えと、イタコの口寄せではどうにも噛み合わない。もともとは天台密教の円仁によって開かれた寺であり、地獄へ落ちた者を救う地藏尊への信仰が結びついたこと、「曹洞土民」という言葉があるように、幕府の権力と結びついた臨濟宗とは異なり、民衆への布教を中心とした曹洞宗では、請われるままに祈禱なども行っていた点からも、恐山信仰を受け容れる素地はあったのだろう。

山門の太い柱は立派だったが、それほど古いものには見えな
い。本堂で参拝を済ますと、いよいよ地獄巡りの始まりである。
ごつごつした熔岩がうねるように続く。表面が青白い地表には、
ところどころ枯木が生え、窪みから臭い煙が噴出している。

道の両側には小石が積み上げられ、隙間に挟まれた風車は、

カラカラ音を立てて回っている。全くこの山はカラスだらけだ。左前方の丘には身の丈数尺の地藏菩薩が立っているが、その頭にもカラスは止まっている。地表の白さとこの鳥の黒い翼が、不気味なコントラストをなしている。

寺の境内で苛められることもないため、カラスは人を恐れず我が物顔の様子。盛んにカアカア鳴いて、翼をばたつかせると枯枝から飛び立つ。納骨堂や夭折した者の名を刻んだ石が並ぶ中、道端のお地藏さんは頭に手拭が被せられ、様々な柄の着物を纏わされている。

一口に霊場と言っても、人はここに仏による救いではなく、じかにあの世を見たくて来るのだろう。白い岩が白骨を連想させるため、一面は粉々となった骨の山に見えてくる。累々たる

墓場の連続、といった趣か。小さな丘を幾つか越えると、彼方に緑がかった宇曾利山湖が姿を現す。岸边は極楽ヶ浜と呼ばれている。

湖岸に近づくにつれて、再び硫黄の臭いが鼻を突いた。水面はどこどころ黄色く、湖底からは何やら湧き出している。指先を入れてみるとかなり熱い。五十度近くあるのではないか。エメラルド・ブルーの湖水は見かけの美しさとは裏腹に、生き物にとって実に苛酷な世界なのだ。極楽まで辿り着いた、と思いきや、いまだ地獄から抜け切っていない、という悪夢を見ている気がした。

実際、この酸性度の強い湖には、土着のウグイの他は生息できず、普通の魚の尾鰭や卵では溶けてしまうらしい。ただ、対

岸には緑の大地が広がっており、ここにはいない山鳥のさえずりなども聞こえてくる。あそこまで渡れば、地獄から逃れられるに違いない。

しばらくして山門を出て、途中に通った太鼓橋のたもとに戻ったが、すでに口寄せをするイタコの姿は消えていた。

*

車が丘の頂を越えると、気分が明るみだした。太陽もふたたび現われていた。ずっと向こう、ブルターニュ街道の交叉点が告知されているあたりで、ガソリン・スタンドが灰白色に塗った植民地風の木造平屋建で展望をさえぎり、

風のなかにのぼりをなびかせていた——とどこどころまだらに褐色を呈している森のあわいに保たれている若々しい秋のように、突然そこに、りゅうりょう唸りたるヴァカンスの気分が燃えたっていた。ブルターニュのあちこちの岬々の上に広がる広大な白い空は、すでに午後の傾斜の上のためらっていた。

(中島昭和・中島公子訳)

これはフランスの作家ジュリアン・グラックの『半島』に描かれたブルターニュの風景である。大西洋に突き出した荒涼とした半島である。大ブリテン島から逃れたのがケルト人が、ブルターニュ公国を作っていたが、十六世紀にフランス王国に併合された。ケルト人の言葉は、フランス語とは系統の異なるブルト

ン語に保存されている。フランス本土の中の異国であり、この自然を愛したグランクは、処女作『アルゴールの城にて』でも舞台とした。

本州の一番北にある下北や津軽には、十七世紀頃までアイヌ人が住んでいた。奈良時代から進出した和人によって、陸奥や出羽の住民は早くから同化していたが、最北端の地には、近世に至るまでアイヌの文化が生きていた。その後、この地のアイヌ人も同化を余儀なくされ、アイヌ語の東北方言も消滅してしまった。本州の中で最後まで同化を拒んでいた地方であり、荒涼とした自然と灰色の空が広がる。僕が下北半島の北東端、尻屋崎しりやざきを歩きながら、フランスのブルターニュ地方を思い浮かべたのも、偶然ではなかったのである。

対岸は北海道の渡島半島おしまである。青春の頃の思い出が詰まった北海道に比べて、本州の北端は人影も乏しくとぼ、目を見張るものはない。僕は一人で尻屋崎の林道を歩いていて、海岸から吹き上げてくる風が、針の山のような松の葉の間を抜けていく。水面を渡る海鳴りと響き合い、トーンの低いホルンを吹き鳴らす。

左方の草原くさほらには、茶色い肉牛がしゃがんでいたが、こちらに気づいて一斉に立ち上がった。ヤツケが風をはらんで、ハタハタ音を立てている。気を立たせるのは危険である。距離を取ると、向こうも安心したのか、また座り込んだり、草をはみ出したりした。

牛の間にも上下関係があるのか、ボスのような牛が歩くと、残りも付き従っていく。角を向け合っているのは、威嚇し合っているのか、ふざけ合っているのか。

溝を隔てた先には、馬が数頭たたずんでいた。地面にはタンポポに混じって、橙に紫色の斑点がある、可憐なエゾスカシユリが咲いている。足下の花と遠方の馬の群れを写真に収めた。茶色い馬のほかにも、黒っぽいや灰色がかつたのもいた。たてがみを風にはためかせ、首をもたげたりして、隣の馬とむつま合っている。

灯台の建つ尻屋崎という地名は、アイヌ語の *si-ya*、「絶壁のある港」に由来するという。ここは海峡に流れ込む対馬海流と、太平洋の千島海流がぶつかり合う。船の難破する墓場を見下ろ

す断崖に、白亜の灯台は建っている。風雨と波による侵食を受けて、そそり立つ崖には、怪物の歯のような鋭い凹凸が刻み込まれている。沖には小島が二つ、右の方が親で、左の方が子といった趣である。対岸の北海道が青くかすんで見える。

午前中に牛の群れを見た所へ戻ってきた。林道の向こうから、一台の軽トラックが走ってきた。それに追われるように、無数の牛が走りだしてきた。手前にいた牛たちも、再会を喜ぶかのように、迎えに行くのだった。両者が合流すると、鼻面を互いに近づけ合っている。牛たちは一斉に丘の方に駆けていく。五十頭はいただろうか。中にはのろのろした奴も、大人の牛に必死についていく子牛もいる。草原を移動する茶色い筋肉の波に、

しばらく目を奪われていた。

夜中になると風雨ともに強くなった。うなっているのは風なのか、それとも海なのか。下北の厳しい自然を音で感じていた。長い夜だった。朝になると、一転して凩いだ穏やかな日和ひよりとなった。半島を巡っている間、これほどの晴天に恵まれたのは初めてだった。

僕は尻屋崎を発ったが、前日の宿の夕食に出たイカの刺身の味を思い出していた。いいイカはまだ色が赤黒い。白くなってしまったのは古いから、生では食べられないという。刺身の鮮度がいいかは、口の中に入れると溶けて、ほんのりとした甘みで分かる。都会で食べる、白くて固いイカとは大違いだった。

田沢湖および乳頭温泉

下北半島を出た僕は、盛岡から田沢湖線に乗った。当時はまだ秋田新幹線は開通していなかった。とはいっても、沿線の様子が変わったわけではない。新幹線の車両が通るようになって、相変わらず単線のままで、洗濯物が干してある軒先を過ぎて、踏切を渡っていくところなど、新幹線とは名ばかりであるのが分かる。

当時は田沢湖線しか通っていなかった。窓を開けると、吹き込んでくる風が涼しい。赤あか渕ぶち駅を出ると、列車はいくつもトンネルを抜けていく。雪崩なだれよけの囲いの中に信号所がある。単線のために、上り特急の通過待ちとなった。中は昼間でも夕暮れ

のように薄暗い。下は溪流となっており、増水した水が一気に滝となって落ちていく。

田沢湖駅に到着した。上りの特急が四十分も遅れたり、各停が運転打ち切りになったりしていた。それだけ、秋田県内の降雨量が凄まじかったのだらう。すでに雨は上がっていたが、田沢湖畔へ行くバスはガラガラだった。

田沢湖というと、日本で一番深い湖として知られている。最深部は四三メートルもある。カルデラ湖で円い形をしている。それ以外に何があるんだろう？

ユースホステルに荷物を置いて、自転車で湖岸を時計回りに一周することにした。豪雨のために田沢湖の水位も上がってお

り、湖岸の草も水をかぶって、さざ波がぴちぴち岸に打ち寄せている。

ところで、見るべきものはあったか？ 辰子姫の像と御座石

神社くらいで、円形の湖岸は入り江や半島もないから、対岸も丸見えで、どこから見ても大して代わり映えしない。水深の深さで田沢湖、支笏湖に次ぐ十和田湖とは、風景の美しさでは争えない。これらの湖は、どれも火山が陥没したカルデラ湖だが、田沢湖に関しては、深いだけを取り柄の湖だったのである。

何で田沢湖なんかに来たんだろうと思っていたら、ユースホステルに当時の僕と同じくらいの年、三十歳前後の青年がいた。意気投合して、翌日のスケジュールについて話した。たまたま同室となった人と、親しく話ができて、旅の情報交換したり、

一緒に遊びに行けたりするのがユースホステルの魅力である。日が暮れてからまた降り出した雨は、ますます激しく屋根を叩いていた。

「乳頭温泉に行こうと思うんだけど、良かったら一緒にどうですか」

次の日の朝、例の青年に声をかけられた。彼は車で来ていた。野天風呂が混浴だったらしいのに、とこだわっている。誘われるままに乗り込み、田沢湖を離れたのだが、あいにくの悪天候である。降りはずます激しくなり、叩きつける雨で道路に水がたまり、タイヤが跳ね上げた水しぶきを、車体がかぶってしまふほどである。

乳頭温泉は乳頭山の西麓せいりやくに点在する温泉で、標高八百メートルの高地にある。道幅の狭い砂利道じやりみちを上っていく。向かっているのは鶴の湯である。この温泉ではもつとも歴史があり、久保田（秋田）藩主も湯治とうじに訪れていたという。

到着する頃には小降りとなった。ひなびた温泉宿といった風趣ふうしゆである。焦げ茶の板塀の建物は、半世紀ぐらいの歳月を感じさせる。水車は山からの濁流を受けて、すごい勢いで回っていた。

「屋内の温泉は狭いから、野天風呂に入りませんか」

彼は混浴を期待していたのだが、猿の出て来るような山中さんちゆうでなければ、今時存在しないだろう。目の前に更衣室があった

ので、裸になって乳白色の温泉に入った。張り出した屋根からは簾すだれが下がり、夜に照らすランプも吊つるされている。

木の枠で囲まれた浴槽は広々として、周囲には砂利が敷かれている。隙間からぶくぶくガスとともに噴き出した湯は、木の樋を通して運ばれてくる。背後の斜面には、広葉樹やクマザサが茂っている。

正面には小さなお堂があるのだが、左右に控えているのは、こまいぬ狛犬ではなかった。何と巨大な二柱の男根だったのである。ほうじょう豊穰を祈願する点では、ヒンドウ教のリングと共通している。こんな太くて大きい代物しろものは、ウルトラマンでも持っていないだろう。石造りの物を指さして彼は笑っている。

「本当にリアルに出来ているなあ」と僕が言うと、彼は「東北

には多いんだよ、遠野でも見たし」と答えた。

降り続いた雨のおかげで、長湯していられた。こういう古風な趣の温泉は、数が少なくなってきた。降っているのが雪だったら、なおさら情じょうちよ緒を感じたことだろう。

中にいたのは終始、僕ら二人だけだった。満喫まんきつしたところで上がり、着替えてから水車の前で記念撮影。先ほどの野天風呂の前に出た。雨で濡れて見えなかった看板が少し乾いて、墨の字が浮かび上がっている。二人は目を疑った。

「女湯」

二人は女湯に入っていたのだ！もしそこに裸の女性が入ってきたら、混浴だと喜んでいるところではない。金切り声とともに……あの男根の意味も分かった。この温泉に入る女性は、

こたから
子宝を授かることを祈ってきたに違いない。お湯が乳白色であることも象徴的だった。

八甲田山と奥入瀬

僕が二回目に東北を訪れたとき、前回の旅から八年が過ぎていた。今回は一人旅ではなく、母と妹と三人の家族旅行だった。その間に父が亡くなり、母も足腰が弱ってきていたから、家族で遠出するのもこれが最後かもしれないと思った。

羽田空港から日航機で青森空港へ。レンタカーを借りて八甲田山に向かう。運転するのは妹である。吞兵衛のんべえの僕は、父と同じく免許を取得しなかった。ロープウェイで一気に、初秋の山を眼下に上っていく。

八甲田山といえば、明治三五年（一九〇二）、青森歩兵第五聯隊れんたい第二大隊が、日露戦争を想定した雪道踏破の訓練中、暴風雪の

中で彷徨し、二一〇名中一九九名が死亡した。映画『八甲田山』は、新田次郎の『八甲田山死の彷徨』が原作である。ちなみに、『強力伝・孤島』所収の「八甲田山」は、原作となった長編の原型となった短編である。

その日の天候は快晴。悲劇の舞台となった山は、すでに秋たけなわとなっていた。ロープウェイの乗車時間は約十分。気温は摂氏八度。東京近郊なら初冬並みの寒さである。中腹以上は紅葉が進んで、赤茶と黄と緑が織りなす絨毯となり、上空にぽっかり浮かんだ雲が、斜面の凹凸にゆがんだ影を落としている。

山頂からは円弧を描く陸奥湾が、午後の光を浴びて白く見える。中央に広がるのが青森市街。左手になだらかな丘陵が伸びるのが津軽半島。右手の鎌のように湾の入口を遮るのが、かつて一人旅した下北半島である。

大小の石が転がる山道を進むと、前方に黄金色に輝く沼が見えた。枯れ草に縁取られた水面は、大気を透過してきた光線で、無数の星くずがきらめいている。岸边を包む山並みには、晩秋の趣を添えるナナカマドの赤い実がなり、澄んだ青空に映えて見える。強い日射しと澄んだ大気。光は浴びると肌を刺し、冷やかな風が背筋を震わせる。その間、妹は母の手をずっと引いていた。

奥入瀬のホテルに荷物を置いた後、十和田湖方面に車を走ら

せた。溪流は川幅が狭く、泡を立てて渦を巻いている。緑のトンネルの中を、水面からわずかに高い川沿いを、くねくねと上っていく。洪水にでもなれば、この道も濁流の一部となつてしまうだろう。木漏れ日が緑の葉を透かせ、水面に柔らかなまだらの光を落としている。

奥入瀬川の源みなもとにたどり着いた。十和田湖の湖畔を、ドライブすることにした。田沢湖、支笏湖に次ぐ深さを誇る十和田湖は、破局噴火を起こした火山が陥没したカルデラに、水がたまってできた湖である。延喜一五（九一五）年の大噴火では、周囲二十キロが火砕流で焼き払われた。

カルデラのある火山は、山体が崩壊して外輪山を残すのみで、火山の残骸ざんがいのように考えられがちだが、カルデラが生成される

以前は巨大な山容を誇っていたのであり、膨大なマグマが供給可能なことを忘れてはならない。再びカルデラ内で新たな噴火を起こし、広範な地域を焼き払う危険が残っているのである。美しい湖は恐ろしい牙を隠しているわけである。

十和田湖畔の休屋やすみやに出た。山菜そばを食べた後、湖岸を乙女の像に向かつて歩いていく。岸辺からほど近い小島は、木々が赤く色づき、杜もりに囲まれた可愛い祠ほこらも見える。手前の水面は光を浴びて、白昼夢のようにきらめく。幸福な光に包まれた湖面を、カップルのボートがゆったり進んでいく。漁船が走り抜けると、波が幾重いくえにも起こって、湖岸の砂地を巻き込むように打ち寄せる。戯れる水は濾過ろかされたごとく、掌ですくって飲むようなほど澄んでいる。

雲が広がってきた。幻^{まぼろし}はたちまち失せてしまう。冷たい風が吹いてくると、上着を羽織らないではいられなくなる。北国の自然は豹^{ひょうへん}変^{へん}するらしい。わずかの間に、一ヶ月ほども季節が進んでしまった気がした。

翌日の朝、奥入瀬のホテルにある溪流岩風呂に入った。緑あふれる川面^{かわも}の向こうには、紅葉を始めた小山^{こやま}も見える。正面がすべてガラス張りなので、朝日を浴びた光景を巨大な浴槽に浸かりながら、眺められるのである。

朝食を終えた後、チェックアウトして、奥入瀬の上流に向かって車を走らせた。白濁した溪流の近くで止め、しばらく散策することにした。母の手を引いて歩いたのだが、足下がふらつ

くのを見て、老いがここまで進んだのかと心が痛んだ。

十和田湖まで上ったところで、昨日とは反対に左回りで湖岸を走った。カーブがかなりきつく、車酔いしてしまいそうである。山の斜面を上っていき、展望台から湖を遠方に見渡した。波の立たぬ青い湖面は、磨き上げたサファイアの断面のように美しかった。摩周湖^{ましゅうこ}を見下ろした時の、あの感動を思い出した。すべての音が青い水面に吸い込まれていく。底なしの沈黙の奥には、遠い未来に牙を剥くマグマが眠っている。

手前の突き出した御倉半島^{おくくら}と、後方の小さな中山半島、その間が湖の最深部であり、最初に生まれた小さな湖があった所である。現在、中湖^{なかのうみ}と呼ばれる辺りには、かつて川が刻み込んだ溪谷が、湖底に沈んでいるという。その後、湖水がぐっと増

えて、現在の姿になったのは二千年ほど前のことらしい。歴史の浅い湖なので、ヒメマスが放流されるまでは、魚類は生息していなかった。その中湖の湖底で、平安初期に大噴火が起こり、青森市付近まで火砕流で焼き尽くされたのである。

三内丸山遺跡を訪ねて

日本人の起源については、古モンゴロイドの縄文人じようもんじんが先住していたところに、大陸から新モンゴロイドの弥生人やよいじんが移住し、混血を繰り返すうちに、現在の日本人の基礎が形作られたという。かつては縄文人というところ、稲作いなさくを知らない狩猟民族で、国家という観念も持たない原始人というイメージが持たれていた。

しかし、現在では稲作はすでに縄文時代後期に始まっていたとされ、高度な文化を持ち、高い物見櫓ものみやぐらを建てしつかりたてた堅穴住居たてあなに住み、芸術性の高い土器や装飾品を生み出したという。芸術性に関して言えば、実用本位で芸術性の欠けた弥生土

器より、高度な装飾性を備えた後期の縄文土器に、日本人の美に関する躍動的な感性を認めることができる。それを再発見したのが、「太陽の塔」で知られる岡本太郎である。

佐賀県の吉野ヶ里遺跡は、発掘調査に基づいて、弥生時代の建築群を再現しているが、青森市内の三内丸山遺跡も、博物館である「縄文時遊館」の近くに多くの建築物を、集落を想定した姿で配置している。

母と妹、僕の三人は、十和田湖を離れて青森市内の中心に向かう前に、三内丸山遺跡に足を運んだ。歩くのが不自由になってきた母もいたことから、丁寧に見学することはできなかったが。ここではこの遺跡の概要と、感じた印象を述べるにとどめ

よう。

まず「縄文時遊館」では、当時の集落に関する短いビデオが見られる。ギャラリーでは土器や土偶などの出土品や、火起こしの道具、漁労に使われた小舟なども展示され、映像や音響を利用した自然環境も疑似体験できる。体験工房では、土偶や勾玉などの装飾品の製作も、有料で体験できる。

三内丸山遺跡の全体を巡ることはできなかったが、再現された物見櫓はどこからでも目に入る。竪穴住居は小型の物でも、中心に炉があつて、家族が作業したり寝起きするには十分の広さがある。平らになるように地面は削つてあるが、雨水が入らないように、入口は土を盛り上げてある。また入口は小さいので、中はうす暗いものの、雨風を防ぐことができる。大型の竪

穴住居となると、集会場ほどの広さがあり、掘っ立て小屋というイメージからほど遠く、かなり堅固な作りという印象だった。都市国家という段階には達していなかったが、集落としての機能は完成していた。弥生時代のような身分制度は確認されず、人々が助け合って生活する原始共産制の社会だったらしい。

市街地の中心に出た三人は、版画家棟方志功むなかたしこうの記念館を見学し、あわただしく空港に向かった。これが最後の家族旅行なのではないか、という思いを新たにして……。

夏の蔵王をゆく

蔵王ざおうは山形県と宮城県にまたがる火山群で、荒涼とした岩場と花咲き乱れる高原、深い森と白濁した温泉が見られる。冬はスキー場となり、冷却した霧がまとわりついた樹氷は、蔵王の冬の名物として知られている。

蔵王という地名の語源は、修験道しゆげんどうの開祖、役小角えんのおづぬが感得した金剛蔵王権現こんごうざおうこんげんを、山上に祀ったことに由来する。権現とは仏が神の姿で現れた存在であり、三つの目を持ち、右手は三鈷杵さんこしよを握って振り上げ、左手は腰に当てて剣印を作り、右足を蹴り上げた立像で、悪魔調ちやうまく伏のために恐ろしい形相ぎやうそうをしている。

さて、三回目の旅では友人の車に乗って、東北自動車道から

山形道に入り、夕方に蔵王温泉ホテル「ヴァルトベルク」にチエックインした。窓の外は中島のある大きな池で、その裏は林になっており、奥には野天風呂があった。温泉は緑がかつた白濁した湯で、硫黄の臭いかなりする。温度は四〇度ちよつとで適温。岩の間にたまつた湯に体を浸し、ヒグラシの声に耳を傾けた。

翌朝は快晴に近かった。蔵王山麓ざおうさんろくえき駅からロープウェイで樹水高原駅へ。そこから山頂線に乗り換える。すでに灰色の雲が広がっていた。地蔵山頂駅で降りると、向こうに蔵王地蔵尊の石像が見えた。地蔵菩薩とは地獄に落ちた衆生しゅじょうを救う仏である。安永四年（一七七五）に建立された座像で、右手には錫杖しゃくじょうを

持っている。高さが二メートル以上あり、尾根沿いの離れた位置からも拝める。

熊野岳に向かって登り始める。高原植物の写真を撮っていると、ウグイスの声が聞こえてきた。飛び交うトンボの数がおびただしい。何だか雲行きが怪しいと思つたら、ぼつりぼつり降り出した。激しくなつてきたので、不服そうな友人を説得して、地蔵山頂駅に戻ることにした。十二時近かつたので、駅の中のレストランで昼食をとり、しばらく様子を見ていたのだが……。

雨がやみそうにないので、ロープウェイで山を下り始めたところ、雷警報のため運休するとのアナウンスが入った。豪雨となつて外は真っ白で何も見えなくなつた。樹氷高原駅に到着すると、山麓線の方も落雷の危険のため、運休することのこと。

風雨がさらに強まり、大荒れの状況になる。蝶が一匹、避難してきて、構内のガラス窓に留まっている。羽をはばたかせる様子を、友人はビデオに撮影していた。

山の天気は変わりやすい。青空がまた広がりだしたので、冬はスキー場となる「ユートピア夏山リフト」に乗って、観松平へ向かうことにした。

真夏の日射しに目がくらんだ。ウグイスがまた鳴いている。トンボが頭上を過ぎていく。いろは沼に向かった。雨上がりなので、草の葉に滴が^{しずく}ついて、光を受けて輝いている。エゾオヤマリンドウは、青紫の可憐な花がいくつも肩を寄せている。花の写真を撮るのも、山登りする喜びの一つである。天竜の松

は蔵王^{ずいしち}随一の大きさで、堂々と四方に枝葉を伸ばし、畏敬^{いけい}の念を起こさせるほどの、自然の荒々しさと風格を体現している。時折、遠雷も聞こえた。それも間遠になっていく。最初の予定では、地藏山頂駅から御釜^{おかま}（五色沼^{ごしきぬま}）まで歩くつもりだった。雷雨のために実現できなかったが、急速に天候が回復してきた。車で直接、御釜のそばに行こうということになり、ロープウェイで蔵王山麓駅へ下りていった。

売店でアイスクリームを食べていたら、友人がホテルの駐車場から、車を運転してきてくれた。地図で調べると、御釜（五色沼）まで二〇キロもある。地藏山頂駅からだと数キロなのだが、車道ではいったん下山した後、ぐんと大回りしなければならぬ。下りきいたら、今度は蛇行した坂道をぐんぐん上って

いく。

青空が一面に広がってきた。山の斜面は風が強いのだろう。一面に茂る松の高さは、人の背丈ほどしかない。カー・ステレオからは喜多郎の「キャラバンサライ」が流れていた。爽快な気分だった。馬力を上げるために、エアコンは止めた。窓を開けると、高原の涼風が入ってきた。

いったん、刈田岳駐車場^{かただけ}で車を止めたが、午後五時にリフトが止まってしまふので、山頂の駐車場まで車で行くことにした。上りきった所に御釜はあった。ここはもう宮城県である。養和二年（一一八二）の噴火により生まれた火口に、水がたまりだしたのは十九世紀になってからだという。五色沼^{ごしよ}というところ、磐梯高原にある湖沼を思い浮かべる場合が多い。だから、蔵王の方

は御釜と言った方が通りがいいのである。

ちなみに、爆発的噴火で陥没した窪地を、スペイン語で caldera（カルデラ＝釜）と呼ぶのだが、蔵王の御釜はカルデラではなく、円形の火口が釜状であることに由来する。

濃いめのお茶のような湖水は、午後の光を受けて鏡となり、火口の内側を映し出している。時折、靄がかかってくるほかは、水面には全く変化がない。火口には幾筋もの雨水が流れ下った痕^{あと}が見え、草がしがみつくように生えている。

なだらかな馬の背に沿って進む。御釜は少し離れた位置からの方が素晴らしい。ひたすら眺めて感嘆する。滑らかな形とくつきり浮かび上がる水面の色、傾いた日射しの愁^{うれ}いを帯びた光の具合が絶妙なのだ。友人に頼んで、険しい道を車で来たかい

があつた。

駐車場の方に戻り、刈田嶺神社かつたみねじんじやを目指す。かつてここには、金剛蔵王権現が祀られていた。遠くに御釜が見える。なだらかに続く山々は、静かにこちらを見守ってくれている。刈田岳山頂には、幾重にも石が積まれている。賽さいの河原のようだと思つたが、かつての蔵王は女人禁制で、修験道の山だった。異界を思わせる火山地帯で、山伏は生まれ変わるべく修行していたのだろう。

山寺は立石寺

松尾芭蕉の『奥の細道』には、山形の立石寺りつしやくじが出てくる。通称山寺で、花は桜と言うように、山寺と言えば立石寺のことである。岩山の断崖に築かれたのが、名の由来と考えられる。清和天皇の勅願ちよくがんにより、慈覚大師じかく円仁が創建した天台宗たいたいしゆうの名刹で、本尊は薬師如来である。比叡山延暦寺ひえいざんえんりやくじが織田信長おだのぶながに焼打ちされ、伝教大師最澄でんぎやうさいちやう以来の「不滅の法灯」が消えたとき、事前に分灯してあつた立石寺の法灯を、延暦寺に分灯したとされる。立石寺について、芭蕉は次のように記している。

日いまだ暮れず、麓の坊に宿かり置きて、山上の堂に登る。

岩に巖いはを重ねて山とし、松柏年ふり、土石老いて苔滑かに、
岩上の院々扉を閉ちて物の音聞えず。岸をめぐり岩を這ひて
仏閣を拝し、佳景寂寞として心すみ行くのみ覚ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

蟬の騒がしい声が岩にしみ入るように感じられ、芭蕉は心の
深い世界にいざなわれる。『奥の細道』に収められた俳句の中
でも、屈指の名句である。

何で立石寺の話をしているのかと言うと、蔵王の御釜に堪能
して、翌日帰郷する前に、山形市内でお寺参りしようという話
になったからである。僕は友人の車で移動したのだが、鉄道な
ら仙山線せんざんせんの山寺駅で下車する。

ちようどお昼時だったので、参詣する前に腹ごしらえするこ
とにした。手打ちそばと、山形名物芋煮のセットを注文した。
芋煮は里芋、コンニャク、牛肉、キノコを、醤油と砂糖で煮込
んだ素朴な料理である。だしがよくしみ込んで、懐かしいおば
あちゃんの味がする。

根本中堂こんぽんちゆうどうはふもとの方にある。堂内には「不滅の法灯」が
ともっている。日枝神社ひえの境内を過ぎ、山門をくぐると、あと
はひたすら上ることになる。せみ塚は「閑かさや」で始まる芭
蕉の句を、短冊にしたため地中に埋めたもの。芭蕉と弟子曾良そら
の石像もある。狭い石段の左右には、地藏尊と卒塔婆そとばが目につ
く。板には木の車がついていて、それを回すと死者が早く人間
に生まれ変われると言われている。

下界を見下ろすのに良いのは、五大明王を祀った五大堂である。張り出した舞台からは、仙山線の山寺駅、谷間に広がる集落が箱庭のように見える。のどかな風景である。

奥の院と大仏殿までは数分かかる。登山口から全部で一〇一五段を上りきった。大仏殿に祀られているのは阿弥陀如来で、浄土信仰が息づいている山だと感じられた。断崖の上には靈窟があり、日蓮聖人の遺骨の一部が、分骨の形で収められているという。

山寺の参詣を終えた後、喜多方、会津磐梯山の脇を走り、猪苗代湖に着いたのは日暮頃。満月の光を浴びて、対岸の山並みがぼんやり見え、ほの白く光る湖水が印象的だった。帰郷したのは深夜だった。

秋田のお城は久保田城

四回目の旅では、友人と東京駅で待ち合わせ、秋田新幹線に乗った。といっても、盛岡からは田沢湖線と奥羽本線に、新幹線の車両が乗り入れているだけである。踏切のある単線を進み、大曲では新幹線がスイッチバックするのである。

秋田駅に着いて改札を出た。駅前のアーケードを抜けると、右手に、千秋公園というのがある。「ここにあったお城の名前は？」と訊かれたら、「秋田城」と答えたくなるが、それは別称としては誤りでないが、幕藩時代には「久保田城」と呼ばれていた。古代に蝦夷征伐の拠点となった秋田城は、久保田城の北西方向の丘陵地帯にある。

今は千秋公園となった久保田城は、出羽国の北半分が領地だった佐竹氏の居城である。城下の町も久保田と呼ばれていたのであり、秋田と改称されたのは明治になってからである。

佐竹氏は清和源氏の末裔で、代々常陸国を領していたが、関ヶ原の戦いで西軍に与したため、この地に転封となり、幕末まで藩主として支配していた。久保田藩の初代藩主佐竹義宣は、家臣も顔を見られないほど恐ろしい形相をしていたが、兵法のほかにも文芸や茶道にも通じていた。歴代藩主は六十代まで生きられた人と三十代、二十代で夭折した人に二分される。

藩主の多くは新田開発や森林保護、文化庇護に努め、そのおかげで、秋田には江戸中期以降、数多くの文化人が集まった。万民平等を説いた安藤昌益、富国強兵と海外進出を唱えた

佐藤信淵、復古神道によって尊皇攘夷を精神的に支えた平田篤胤らの学者を輩出し、エレキテルで有名な平賀源内も、この城下で西洋画を紹介したという。

久保田城は明治十九年に全焼し、当時の建物はほとんど残っていない。その後、千秋公園として整備され、現在に至っている。最後の藩主佐竹義堯の銅像がある辺りが本丸跡であり、その左手後方に御白州（砂の敷かれた取調所）があった。現在は松の原木が茂り、滝や小川が流れている。歴史資料は久保田御隅櫓の資料館に展示されている。

白神山地と十二湖

秋田県と青森県の県境をまたぐ高地に、広大なブナの原生林が分布している。平成五年（一九九三）に世界遺産に指定された白神山地である。

僕が友人と訪れたのは、四年ほど前の夏のことである。秋田に一泊した後、レンタカーで白神山地にある十二湖に向かった。実際は堰止湖せきとめこが三十数個あるのだが、崩山くずれやまからは十二だけ見えるところから名づけられた。ちなみに、十二湖と混同されやすい十三湖は、さらに北方、岩木川の河口にある潟湖かたこのことである。

秋田からは車で三時間ほどかかる。八郎潟はちろうがたの名残である八郎

湖の脇を通り、高速道路を抜けてからは、五能線ごのうせんに沿って進んでいく。このローカル線は電化されておらず、気動車は時速三十キロぐらいか。自動車だと簡単に追い抜いてしまう。

あきた白神駅前には、ハタハタ館という温泉宿がある。一階で弁当を買うことにしたが、絶品はホタテのわっぱ飯と赤寿司である。わっぱ飯の方は、大きなホタテ貝が甘辛く煮付けてある。鮭さけのそぼろに卵焼き、蟹蒲鉾、漬け物が入っている。赤寿司というのは、餅米に赤紫蘇を炊き込んだもので香りが良く、もちもちして酸っぱい食感が珍しかった。

白神山地の十二湖は青森県側である。湖という名はついていてるが、林の中に囲まれた池といった感じである。その中で実際

に歩いて見た池を紹介していこう。

王池おういけは林の向こうにあつて、道路側からはよく見えなかったが、池の縁を歩くにつれ、柔らかな緑の水面に心を引かれた。抹茶のような深みがある面おもてに、木々の枝葉がくつきり映っている。深い心の世界が水の中にあると思つた。

隣にある越口こしぐちの池は、視界が開けて広がりを感じた。木々が道路に覆いかぶさり涼しげな点は、奥入瀬を思い起こさせたが、川が堰せき止められた池が連なる点では、中国四川省の九寨溝きゅうさいこうに似ている。ただし、水の色はエメラルドブルーではないが。

中の池の前で、僕と友人は昼食をとつた。道路側は崖となつており、その前の東屋あずまやでは無料で抹茶がふるまわれていた。左脇には清水が流れ下つてきていた。水煙が立っているのが見え

る。その前に白衣観音びやくえかんのんが祀られている。

食事をした後、落口おちぐちの池、がま池を通り過ぎて、鶏頭場けとばの池の前に出た。鬱蒼うつそうと茂るブナの林の中で、広く大きな水面は白く映えていた。ガイドブックで美しさがたたえられていた青池あおいけだが、思いの外小さく、木々に囲まれているせいで暗い。昨年の落ち葉が腐らず漂い、白いもやがかかつており、岸边近くの水底みなそこだけが青かった。日が射してくると、水面も青みを帯びてきて、刻一刻表情を変えていく。

斜面の階段を登り切ると、ブナの原生林に入った。二十メートルは高さがあるのだろう。太さも両腕で抱えきれないほどもある。多摩丘陵のブナとは、迫力や存在感が桁外けたはずれである。人間が開発する以前の、原始の日本列島の姿があつた。木漏れ日

の間を進むと、木々の優しさに包まれる気がした。針葉樹が茂る寺院の厳めしさとは異なる、神々の宿るおおらかさがあった。王池方面に戻る途中で、沸壺わきつぼの池を見た。滝の水が注ぎ込む池は澄んでいる。覆いかぶさる枝葉に光が当たり、黄緑色があでやかに映える。水の色は青池よりも青く、吸い込まれるようだった。それからはけもの道に近い道が、谷沿いに続いていく。鰹かつおほどの大きさのシダの葉に感嘆する。葉は中心の幹から放射状に伸びている。原始の森に生きる植物の威厳が感じられた。

男鹿半島を巡る

白神山地の十二湖を見た僕と友人は、五能線沿いの道を進んで、夕方になって大潟村おおがたむらに入った。陸繋島りくけいとうだった男鹿半島が、北の米代川よねしろ、南の雄物川おものから延びた砂州で、海峡を外海から隔てたのが八郎潟の始まりで、日本第二の大きさを誇っていたが、食糧増産のために干されて大潟村となった。

干拓地であるだけに、遠くに昔の湖岸である丘が認められ、どこまでも平らな地面に水田が広がる。ここで収穫される「あきたこまち」は、毎日僕が食べている米だ。道の両側には防風林が並んでいる。人家も店も見当たらない。直線の道が延々と続く。人が住んでいるという感じがしない。

男鹿半島に入った途端、道はくねくね曲がるようになった。畑と草原が広がっているだけ。人影が見られないし、人家もまばらである。海岸線が現れてきた。磯浜の先には漁港がある。海は西日を受けて白く輝いている。その夜は男鹿温泉郷に泊まった。

男鹿半島の名物料理といったら、磯焼きだそうである。名前を聞いたときは、魚や貝を磯で焼いた料理か何かだと思つたが、予想は全く外れていた。

宿泊先の男鹿ホテルで、磯焼きの実演を見た。秋田杉の桶おけに三時間以上炭火で焼いた火山岩の丸石を入れると、ブリの入った水が沸騰する。石は千度から五百度になる。白味噌に太平山という名の酒を溶かし込んだ物で味付けする。だしはブリから

出たものだけである。それに豆腐とネギを加えてお椀に分配していく。使った石はもろくなるので、三度までしか使えないという。

夕食の後、近くの会館でなまはげの実演を見た。入口からなまはげに扮ふんした若者が、なたを持って「言うことかねえ子はいねえか」と言いながら踊り出した。小さい子を目かけて突進していく。自分の子がいい子なら、親は子どもを抱きしめる。言うことかかない子は、なまはげに髪の毛を引っ張られ脅される。

なまはげの若者は普段の服に着替え、計六名で大太鼓を叩き始めた。皆二十歳ぐらいで、中には女の子も混じっている。都会に出ずに仕事の後に練習を続け、海外に公演に出ることもあ

るといふ。酸素を吸いすぎて後ろにひっくり返る人もいる。

しばらく休んでまた叩き出す。若いだけあって、力強さとスピード感には圧倒させられる。カメラを向けられると、思わず意識して、バチを振るう腕にも力が入る。全力を出しながら、リズムに酔っていくのが分かる。リーダーの若者が時々耳を澄ます。歓声が少ないとやめてしまう合図をするので、観客は拍手と励ましの声を上げずにいられない。

空き地での実演から始まった活動は、観客が路上にはみ出し、警察に止められることもあったという。男鹿市の後援で会館は建てられたが、今度は会場使用料などで年間数百万円かかるようになり、費用は制作したDVDなどの売り上げで賄^{まかな}っているとのこと。

ホテルをチェックアウトして、レンタカーで入道崎に向かった。男鹿半島が日本海に突きだした北方の岬である。近づくにつれて、視界を遮るものはなくなる。世界が目の中に飛び込んでくる。夏空は晴れ上がり、海も空も青い。

緑の草原には木が生えていない。可憐な赤い花が、ところどころに咲いている。高原で見られるような風景が、海岸に広がっているのである。近づいていくと崖になり、自然の彫刻を思わせる奇岩の近くで、素潜り漁をしている人がいる。腕時計を見ると、まだ午前九時過ぎ、人影はまばらである。

蜃気楼^{しんきろう}が見えるよと友人が言った。水平線の雲の続きを目で追う。見えるはずのない対岸の山並み、恐らく北朝鮮あたりの

海岸だろう。雲の上に大型船が浮いている。ゆらゆら揺らいているためか、カメラを向けてもなかなか焦点が合わない。右方には平坦な小島があり、砂地には海鳥の姿しかない。

岬の灯台は白と黒の横縞シャツをまとっている。囚人服みたいな出で立ちである。最近塗り替えたのか、色が鮮明なのでおニューのシャツだと思った。日がかげつてくると、海の色も灰色に変わってしまった。

入道崎を南に下ったところに、八望台はちぼうだいという展望台がある。

ここは高松宮たかまつのみやでんか殿下の命名であり、殿下お手植えの松も存在する。スロープを上って展望台に出ると、マールの二ノ目潟が見える。マールというのは、火山を形成するには至らなかつた小火口のこと、地下水がたまって湖になっている所が多い。男鹿半

島が火山島だった名残である。

二ノ目潟の湖面はほとんど動かない。森に囲まれた湖には人は近づけない。青みがかった水面と、周囲の緑とのコントラストが鮮やかだった。反対側の一ノ目潟は、大きさでは二ノ目潟を上回るものの、展望台からは遠くて小さい。

八望台から南に、海側に向かって移動したところに、男鹿水族館のG A Oがある。男鹿をひっくり返した命名である。大水槽にはブリやサメ、亀のほか、数百匹の魚が泳いでいる。小さい方の水槽には、秋田名物の魚で、しょつつの原料にもなるハタハタが見えた。孵化ふか前の赤紫の卵の塊、生まれたての稚魚もいた。

このハタハタは雷が鳴る時期によく捕れるので、カミナリウ

オとも呼ばれている。そもそも、ハタハタという名自体が、雷鳴の音を写した擬音語だという。うま味が凝縮したような魚で、脂気があるわりにはさっぱりした食感である。表面にうるこがないのも特徴である。

熱帯のサンゴやアマゾンの怪魚のほか、ピンクや真つ白、レースのようなひだがついたり、無数の糸のような足を垂らしたクラゲ、秋田の森に住む淡水魚や、シマヘビ、アオダイショウのコーナーもあった。

男鹿水族館G A Oには、看板娘ならぬシロクマの豪太君がいる。オーストラリア（豪州）から来たので、この名前がついたとのこと。豪太君は氷の中に入ったリングを、何とかして食べようとする。うまく割れないので、プールの中に落として、少

し溶かしてから食べ始めた。

観客の方を見ながら歩き回るのは、何とも億劫おっくうそうである。それよりは、水の中で泳いでいた方が気分が良いのだろう。水面に太い足を突き出し、シンクロナイズド・スイミングを見せて、愛嬌あいきょうを振りまいていた。ただ、一頭ではさびしいに違いない。

男鹿半島で見たい場所には、あらかた行ってしまった。細い道がくねくねと延び、草原がいきなり海へ落ちる崖に沿って、上り下りを繰り返している。サハリンに近い島、利尻島りしりとうの海岸線に似ている。怪獣映画のゴジラの形をした岩を探したが、どれがゴジラ岩なのか分からなかった。平らな磯浜に多数の車が

止まっていたが、周囲には店も食堂も見当たらない。

パンフレットを見ていたら、寒風山かんふうざんに行ってみたくなった。これは半島東部にある山で、標高は三五五メートルであるが、カルデラ状の火口を持つ外輪山と、数個の熔岩円頂丘を持つ、本格的な複式火山なのである。

男鹿駅を過ぎたところで、山に向かって車のほとんど通らぬ道を進んでいく。樹木が生えぬ山の斜面は、一面芝生に覆われている。馬力のないレンタカーは、エアコンを切って急坂を上っていくしかない。標高は低いものの、巨大な火山のミニチュアのように、風格を感じさせてくれる。標高千メートル以上の高原に來た感じである。

山頂には回転展望台があった。ここからの眺めは雄大である。

八郎潟干拓地の調整池に目を向けると、岸边が直線に切られたようで、いかにも人工的な気がした。干拓地の縁に沿って水路が延びている。江戸時代の旅行家で民俗学者の菅江真澄すがえますすみ（一七五四〜一八二九）は、文化七年（一八一〇）男鹿を旅した。ちなみに、この年に作曲家のショパンが生まれている。

菅江は「男鹿の秋風」という文章を残している。水路を渡って半島に入り、寒風山に登った菅江は、八郎潟を琵琶湖に、周囲の山を近江の山々になぞらえた。水田が広がる辺りもかつては、なみなみと水をたたえた八郎潟だった。さぞ素晴らしい眺めだったろうと、頭の中で水田を湖面に置き換えてみた。

男鹿半島の付け根の方を見た。島が本土とつながったという成り立ちは、函館山はこだてやまと同じである。砂州が伸びていったのだか

ら、陸地の標高は低い。その先には港のタワーや風力発電の風車が見える。反対側に視線を移すと、先ほど来たゴジラ岩の辺りが見える。

昼食は山頂から少し下りた展望台でとった。秋田弁のおぼちやんが、「何にしようかな、カレーライスがおいしいよ。私は店員、あなたはお客様。なまっているのは生まれつき」と歌っていた。妙にテンションが高い。

いよいよ旅の終わりが近づいた。寒風山から秋田までは、車で二時間はかかるらしい。道は直線で空いている。調整池の橋を渡れば、半島ともお別れである。

時間が中途半端なので、秋田ポートタワー・セリオンに寄る

ことにした。タワーに上るのは無料である。四階が展望台で、そこからは寒風山が見える。先ほどは山の上からタワーを見下ろしていたんだよと、友人が教えてくれた。

三階のギャラリーでは、秋田城に関する展覧会が開かれている。ここは古代の蝦夷征伐において、最前線だった拠点である。先住民の蝦夷が朝貢しに来て、酒を振る舞われていたという。また日本海の対岸にあった渤海からも、使節が来日していた。

その証拠に当時のトイレ跡には、豚の寄生虫が発見されており、豚肉を食べていた大陸の人間の渡来が裏付けられるのとどだった。

あとがき

僕が訪れた岩手、青森両県はかつて、陸奥国むつのくに、「みちのく」とも呼ばれていた。山形、秋田は出羽国でわのくにに属していた。そこで本書は『みちのく・ではのたび』と名づけた。実際に旅した時期は、以下に示す通りである。

第一回（一九九五年）

八月三日 平泉中尊寺に参拝。毛越寺に宿泊。
八月四日 毛越寺を出発し、下北半島恐山を巡る。
八月五日 下北半島尻屋崎を歩む。

八月六日 田沢湖の周囲をサイクリング。
八月七日 乳頭温泉に寄り、帰郷。

第二回（二〇〇三年）

九月二三日 八甲田山、十和田湖を訪れ、奥入瀬に宿泊。
九月二四日 十和田湖を巡り、青森市内の三内丸山遺跡などを見学し、帰郷。

第三回（二〇〇六年）

八月七日 蔵王温泉に宿泊。

八月八日 蔵王地蔵山頂駅、観松平、御釜（五色沼）を巡る。
八月九日 立石寺に参拝し、猪苗代湖を経て、帰郷。

第四回（二〇〇九年）

八月七日 秋田久保田城跡を訪れ、秋田駅前宿泊。
八月八日 白神山地、十三湖を巡り、男鹿半島に宿泊。
八月九日 男鹿半島入道崎、八望台、男鹿水族館、寒風山を経て帰郷。

二〇一四年 二月一九日

高野敦志

第二版では「三内丸山遺跡を訪ねて」の一章を追加した。

二〇一五年 二月一五日

高野敦志